〈動向〉

「難民問題への本学の取り組みー 2013 年度～ 2014 年度ー」

舟木　譲

『人権研究』前号書評において既述されているように、本学では UNHCR 駐日事務所の協力のもと、2007 年度より難民推薦入試制度による難民奨学生の受け入れを行ってきている[*1]。特に昨年度(2013 年度)より 6 月 20 日「国連難民の日」を中心に難民推薦入試制度によって入学した学生やその他一般学生ならびに教職員等が協力して講演会・シンポジウム・イベントを実施し今年度も新たな取り組みを行う事ができた。以下に昨年度から始まった取り組み、また実施された講演会等の概要を記すこととする。

2007 年度から UNHCR 駐日事務所より推薦された学生が当初 2 名ずつ入学していたが、それぞれの学生の背後にある政治的背景をはじめとした諸状況や、在籍人数が極めて少ないこともあり、本学関係者の中でもその存在や在学時に抱えている困難さを認知するものの少ない状態が続いていた。そうした中、2013 年 2 月に難民支援協会より発行された日本在住の難民の方々の出身国の料理レシピを紹介した『海を渡った故郷の味』を参考にした料理を大学生協に協力していただき、難民問題に取り組んでいる大学の学食で提供し、難民問題をより身近な事として理解する一助にするというプロジェクト「Meal for Refugees」が実施されることとなり、本学に 2012 年度、上記入試制度で入学した学生が中心となり、本学でも実施する事となった。

この学生の呼びかけと本学生協の全面的な協力の下、2013 年 5 月 20 日 -24 日ならびに 6 月 17 日 -21 日の計 10 日間上ヶ原キャンパスの学食において『海を渡った故郷の味』から選ばれたメニューを提供することとなり、合計で 500 食を越える提供を行う事が出来た。また同書を生協書籍部でもコーナーを設けて販売していただき、料理という切り口から難民問題の啓発の糸口を見つけるという試みが行われた。

また、このイベントに合わせて講演会ならびにシンポジウムが開催され、多くの学生諸君への問題の提示と啓発が実施され、またこれまで一部の教職員・学生の中でのみ共有されてきた「難民問題」への理解や、本学で学び生活する難民の学生諸君が抱える様々な困難を知る機会が与えられることとなった。以下にその概要を紹介する。

1．主題：「＜世界難民の日＞を覚えてー『見えなくされている人々へのまなざし』ー」

・講演会　日時：2013 年 6 月 3 日（月）
16 時 50 分ー 18 時 20 分
場所：B 号館 204 号教室
内容：①「関西学院大学と難民学生の受け入れ」
平松一夫[*2] 氏（関西学院大学商学部教授）

*1　詳細に関しては下記の「『難民』学生推薦入試制度」の項を参照。
関西学院創立 125 周年記念事業推進委員会年史実行委員会編『関西学院事典　増補改訂版』学校法人関西学院、2014 年
*2　関西学院大学が難民推薦入学制度を導入した当時の学長。奨学金や学費の確保のための募金制度の創設等を実施。

②「難民支援協会の働きと“Meal for Refugees”」
田中志穂氏（認定 NPO 法人難民支援協会　広報部チームリーダー）

・交流会　日時：2013 年 6 月 3 日（月）
19 時 00 分－ 20 時 30 分
場所：関西学院会館「翼の間」
内容：上記講演者ならびに本学在籍難民学生らを中心とした報告・交流会

2．主題：「＜世界難民の日を覚えて－私たちが知るべきこと、できること、やるべきこと－＞」

・講演会（パネルディスカッション）
日時：2013 年 6 月 17 日（月）
15 時 10 分－ 16 時 40 分
場所：第 5 別館　4 号教室
内容：①基調講演「難民と日本」
根本かおる *3 氏（ジャーナリスト、UNHCR 協会理事）
②在籍難民学生の声
③パネル・ディスカッション

・交流会　日時：2013 年 6 月 17 日（月）
18 時 30 分－ 20 時 00 分
場所：関西学院会館　レストラン「ポプラ」
内容：上記講演者ならびに本学在籍難民学生、J-FUN ユース所属学生らによる意見・情報交換ならびに懇親

2013 年度春学期においては、大学主催の人権問題講演会主題の一つとして難民問題に関して根本かおる氏に講演を行っていただいた他、上記の二つの講演会ならびにシンポジウムを実施し、特にこれまで学内において公に話をすることがほとんどなかった在籍難民学生自らの口で、これまでの経歴や経験が一般学生らに語られたことは大きな意味があったと思われる。また、こうした一連の講演会や企画の中で、新たに「無国籍」者の存在とその方たちが置かれている状況についての問題性が明らかとなり、そのことを受けて、2013 年度秋学期には下記のイベントを開催するに至った。

・イベント名：大学生×NPO×国連　シンポジウム「“無国籍って？”　難民と考える国籍のはなし」
日時：2013 年 11 月 23 日（土）
13 時 00 分－ 16 時 30 分
場所：関西学院大学
梅田キャンパス　1405 号教室
内容：①基調講演「無国籍とは何か？」
陳天璽氏（無国籍ネットワーク代表・早稲田大学准教授）
②トークセッション：基調講演を受け、無国籍の当事者を交えてのセッション
③パネルディスカッション
共催：NPO 法人　無国籍ネットワーク
関西学院大学
後援：認定 NPO 法人　難民支援協会
UNHCR 駐日事務所
RAFIQ（在日難民との共生ネットワーク）
助成：公益財団法人　大阪コミュニティ財団
文部科学省科学研究費基盤 B
「社会的包摂のための実践人類学的研究」

*3　2013 年 5 月 28 日本学において開催された本学主催の国際人権シンポジウム「『平和への権利』が切り拓く未来」のパネリストのお一人。また同日に開催された関西学院大学人権問題講演会の講師として「日本と出会った難民たち：生き抜くチカラ、支えるチカラ」と題して講演を実施。肩書きは当時で、2013 年 8 月より国際連合広報センター所長。

本イベントにおいては日本において語られることの少ない「無国籍」者の方々が直面している問題について多くの知見を得ることが出来た。特に日本在住の「難民」2 世の方々の中には「無国籍」となる可能性を有する人々が存在する等、極めてマイノリティであるが故に見過ごされそうになる問題への取り組みと啓発の重要性に関して改めて多くの気づきを与えられ、2013 年度の「難民」問題に対する大学が主催した各種企画は終了し 2014 年度の新たな取り組みへと引き継がれることとなった。

2014 年度に入り、2013 年度に中心となって協力をしてくれた難民学生の何名かが卒業し新たな歩みを始めた中、残った学生が積極的に活動し、2 回目となる”Meal for Refugees”を前回同様本学生協の全面的な協力の下 5 月 19 日ー 23 日、6 月 16 日ー 20 日の計 10 日間上ヶ原キャンパスの学食において特別メニューの提供を行っていただき、全てをあわせて前回を上回る 900 食近く販売された。

また難民問題のさらなる啓発に向けて 2013 年度に協力をいただいた各団体の協力も得ながら、「国連難民の日」を覚えて下記の企画が実施された。

１．主題：「難民問題を考えるー共に生きていくためにー」
日時：2014 年 6 月 8 日（日）
14 時 00 分ー 17 時 00 分
場所：関西学院大学
大阪梅田キャンパス　1405 号教室
内容：①講演「コンゴ民主共和国での難民体験、韓国から学ぶコンゴの民主化」
ヨンビ・トナ氏（コンゴ難民・韓国光州大学専任助教）
「日本の難民受入制度の現状と展望」
田中恵子氏（RAFIQ 代表）
「韓国：難民法の制度、難民支援センターの開設そして第三国定住移民受け入れの動き」
松岡佳奈子氏（難民研究フォーラム事務局・研究員）
②講演者によるパネルディスカッション
主催：関西学院大学
協賛：認定 NPO 法人　難民支援協会
RAFIQ（在日難民との共生ネットワーク）
運営：J-FUN ユース K.G.

本企画において、韓国における難民受け入れの現状とこれまでの道のりに関して、主導的な役割を担ってこられたコンゴ難民であったヨンビ・トナ氏の講演を通じて解説をいただき、それを受けて日本の難民受け入れの現状を大阪に拠点を置いて難民ならびに難民申請をしている方々の支援を行っている RAFIQ の代表である田中氏から報告がなされた。最後に、東京大学博士課程後期課程在籍中で難民研究フォーラム事務局・研究員の松岡氏からさらなる解説を付して頂き、日本の難民受け入れ制度の今後の方向性に関して多くの示唆をいただくことが出来た。

２．2014 年度春季人権問題講演会
日時：2014 年 6 月 18 日（水）
13 時 30 分 -15 時 00 分
場所：関西学院大学　西宮上ヶ原キャンパス
図書館ホール
講演：「国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）の働きを覚えて
ー今日の世界におけるその使命と活動の実際ー」
Michael　Lindenbauer 氏（UNHCR 駐日事務所代表）

講師の Lindenbauer 氏は 2014 年 4 月より「UNHCR 駐日事務所」の代表として赴任され、現在の世界における難民の現状と支援の現状ならびに私たちの関わりの可能性と必要性について詳細な紹介を行っていただいた。

2014 年度春学期に関しては、上述の企画ならびに

講演会を実施したが、それと共に、難民問題に関心のある本学在学生より要望と協力の申し出のあった「UNHCR 難民映画祭」の本学開催に向けての準備が同時並行で行われた。

2014 年に第 9 回目を迎える「UNHCR 難民映画祭(以下、「映画祭」と表記)」は、これまで実施された過去 8 回、関西での上映は無かった。しかし、こうした企画が東京を中心に行われていることを知った本学学生の間から「難民推薦入学制度」を有している本学において「映画祭」を開催するための活動が 2014 年初頭より始まった。中心となって行動を起こしたのは本学の国連ユースボランティアプログラムに参加し、ボスニア・ヘルツェゴビナで働いた経験を有する学生、「ドイツ国際平和村」でのボランティア経験を有する学生、そして J-FUN ユース K.G に所属する学生らであった。それぞれの経験から難民問題に対する関心を有し、日本における啓発と協力の必要性を切実に感じ、積極的に UNHCR 駐日事務所へ連絡を取って本学における「映画祭」実施を求める運動が開始されることとなった。3 月下旬には本学教員との相談の上、上映実施の可能性とそのための条件について打診するという形で実現に向けての歩みが始まった。

その後、上述の 6 月に開催された春季人権問題講演会の講師として Michael Lindenbauer　UNHCR 駐日事務所代表が来校された際、応対にあたった本学の神余隆博副学長に関西学院大学において「映画祭」を開催する可能性の打診があったことを受け、学長室会で検討の結果、すでに実施実現に向けての活動を始めていた学生諸君とも協力し、本学人権教育研究室の協力の下、開催に協力することとなった。また UNHCR 駐日事務所の希望もあり、JICA（国際協力機構）関西と共に準備を進めることも同時に決定し、具体的な準備が始まるに至った。

その後、今城大輔氏（UNHCR 難民映画祭プロジェクトマネージャー）、川原直美氏（UNHCR 駐日事務所副代表）、守屋由紀氏（同広報官）、酒本和彦氏（JICA 関西業務第二課長 / 国際防災研修センター課長）、田口亨氏（同研修プログラム・アシスタント）、中尾秀一氏（難民事業本部関西支部支部長代行）、山内麻紀子氏（難民事業本部関西支部）と北山雅博氏（本学人権教育研究室主管）、舟木譲（本学大学宗教主事 / 経済学部教授）が中心となって協議・調整を行い、また上記の学生らを中心に開催当日のボランティアを組織する準備を並行して行う事となり、下記のような形で上映が実現するに至った。

・「9 th.UNHCR 難民映画祭」兵庫県西宮上映
　開催場所：関西学院大学 西宮聖和キャンパス
　　メアリー・イザベラ・ランバスチャペル
　主催：UNHCR 駐日事務所
　共催：関西学院大学
　パートナー：国連 UNHCR 協会
　　国際協力機構（JICA）
　実施日：一日目　2014 年 10 月 25 日（土）
　　川原 UNHCR 駐日事務所副代表の司会によって、Lindenbauer　UNHCR 駐日事務所代表と神余関西学院大学副学長の挨拶の後、「ボーダー(Border)」ならびに「無国籍を生きる（Living Stateless)」を上映。また、酒本 JICA 関西業務第二課長による解説が行われた。

　　二日目　2014 年 10 月 26 日（日）
　　初日に引き続き川原氏による司会によって、「スケーティスタン(Skateistan)」ならびに「シャングリラの難民(Refugees of Shangri-la)」の上映。また、中尾難民事業本部関西支部支部長代行と Manfred Ringhofer 氏（大阪産業大学人間環境学部教授）による解説が行われた。

以上の内容で実施され、最寄り駅から徒歩 13 分というアクセスに少し難がある開催会場となったが、2 日で約 400 名近い来場者を数えることができた。

また何よりも最初にこの開催を希望し積極的な行動を起こしていた学生諸君が中心となり、二日間で述べ 31 名の学生ボランティアが集結し、準備から後片付けまで長時間にわたる献身的な働きをしてくれたことが今回の「映画祭」実施実現の大きな力となったことは忘れてはならない。

以上のようにこの二年間「難民問題」に関する様々な取り組みが行われてきたが、特筆すべきは常に難民当事者学生をはじめ、多くの学生諸君が真摯にこの問題に向きあい、その思いに応える形で難民問題に関係する数多くの組織とそこに働かれる多種多様で豊かな賜物を持った方々の熱心なご教示・ご協力によって多くの企画が実現してきたことである。改めてこの場を借りて心より感謝を献げるものである。また、こうして取り組んできた事柄によって明らかになった多くの問題を受けとめ、良き形でこれからも引き継いでいくための知恵を尽くす必要を痛感する。今後もさらなるご協力を最後にお願いし、報告とさせていただく。